

## 令和5年度ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業（1年目）報告書

基礎学力向上を基盤としたホンモノの学び

～1人1台端末と学習動画アプリを活用した個別最適な学習の推進による基礎学力の向上を目指して～

岡山県立津山商業高等学校

### （1）事業の概要

本事業は、ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業であり、基礎学力および学習習慣の定着を目指すものである。このプロジェクトでは、EdTech サービスを令和5年度から3年間にわたり導入し、学び直しや授業、家庭学習などあらゆる学習の場面で積極的に活用することを促進する。1人1台端末やEdTech サービス等のICTを学習に効果的に活用することで、学習習慣と基礎学力を確実に定着させ、個別最適な学びの効果について研究し、その成果を広く県内の学校に普及することを目指している。

### （2）端末導入からこれまで

#### ①生徒の状況

令和5年度時点では、全校生徒が1人1台端末(Chromebook)を所持している。令和5年度に実施された「1人1台端末導入による学びの変容状況把握のためのアンケート」によると、授業における端末の活用率は高く、約91%の生徒が「1日のうち1回以上授業で端末を活用している」と回答している。また、家庭学習でも約78%の生徒が「よくある」「たまにある」と回答しており、端末を積極的に活用していることが分かる。授業においては、各科目でGoogleフォームによる小テストや振り返り、Google スプレッドシートやドキュメント、スライドの共有機能を活用した協働学習が行われている。授業以外でも、分からないことはすぐにインターネットで検索したり、ホームルーム活動においてもGoogleフォームでクラスの意見を収集したりするなど、生徒たちはICTを積極的に活用している。



#### ②学校の取組

令和5年度に実施された「1人1台端末導入による学びの変容状況把握のためのアンケート」によると、教員の65.8%が「普段どの程度端末を活用させているか」という質問に対して「ほぼ毎回」「半分程度」と回答した。学校自己評価アンケートでも「Wi-Fiと1人1台端末環境を積

極的に活用した授業を行っている。」という質問に対する肯定的な回答は90%であった。

また、「フューチャールーム」では壁一面に大きくコンテンツを表示させたり、4面それぞれに異なる内容の画像を表示することも可能である。机や椅子を自由に動かすことができるため、



生徒同士のコミュニケーションが活発化し、教室と1人1台端末によって教師と生徒のプレゼンテーションがより充実したものになる。このような取組により、授業での1人1台端末の積極的な活用が促進され、結果として令和5年度には日本教育工学協会が主催する学校情報化認定制度の優良校の認定を受けることとなった。

### (3) 研究の概要

#### ①研究主題

基礎学力向上を基盤としたホンモノの学び

～1人1台端末と学習動画アプリを活用した個別最適な学習の推進による基礎学力の向上を目指して～

#### ②研究主題設定の理由

平成30年告示の学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、ICT環境の活用といった指導方法や、指導体制の工夫改善による「個に応じた指導」の充実を図ることの必要性が示されている。

本校は基礎力診断テストの結果から、学年が上がるにつれ国語、数学、英語の基礎学力が低下する傾向がある。令和3年度入学生のベネッセ学習到達ゾーン(GTZ)は、以下の表1のように、上位層は下に引っ張られ、特に中下位層の低下は顕著である。また、表2のように家庭学習習慣が身につけていない生徒が多い。

教員も、生徒の学力に幅がある中で授業を展開することに困難さを感じており、基礎学力の定着や学習意欲の喚起についての課題意識は持っているものの、個別最適な学習に関しては、教員側のリソース不足もあり、着手できていないという実態がある。

そこで、ICT(オンライン学習サービス)を活用して個別最適な学びを実現し、生徒一人ひとりに応じた課題による学び直しでの苦手分野の克服と、定期的な課題配信による学習の習慣化による学力の向上が期待できるのではないかと考える。また、基礎学力の定着と学習習慣の確立から、進路選択の幅の広がりや、学校行事への主体的な取組といった本校の目指す「ホンモノの学びの実現」に向けた相乗効果も期待できる。

さらにICTを活用した授業改善や、指導業務の効率化から、教員の働き方改革にもつながると考えており、研究主題を「基礎学力向上を基盤としたホンモノの学び～1人1台端末と学習動画アプリを活用した個別最適な学習の推進による基礎学力の向上を目指して～」と設定した。

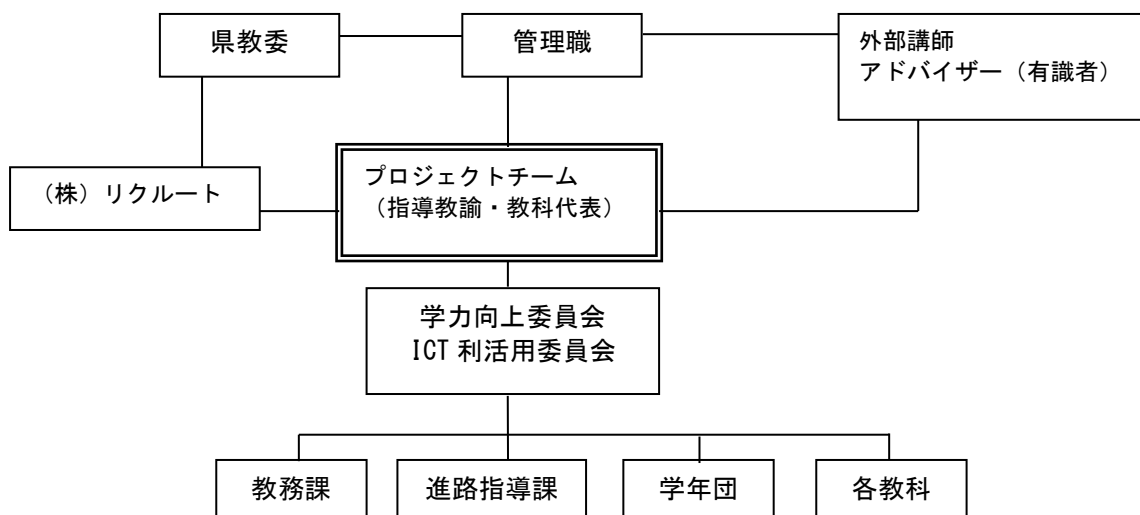
	Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン
令和3年4月	4.4%	29.4%	44.4%	21.8%
令和4年4月	1.3%	17.4%	37.6%	44.7%

表1 令和3年度入学生 ベネッセ学習到達ゾーン(GTZ)3教科(国数英)

	全く・ほとんどしない	30分未満	30分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上
1年	4.9%	26.5%	44.4%	19.8%	4.4%
2年	14.8%	36.1%	33.6%	13.6%	1.9%
3年	12.0%	41.1%	33.5%	12.7%	0.7%

表2 学校の授業時間以外の1日当たりの学習時間 (R4.4.13~20)

### ③研究体制



### ④研究計画

ICT活用による個別最適な学習推進し、以下の研究を行う。

- ・生徒一人ひとりの各種テストの結果に応じた学び直しの連動課題配信による基礎学力の向上
- ・到達度テストからの連動課題配信の継続的な実施（週末課題から定期的な課題配信へ）
- ・単元テストとフォローアップ配信機能を活用した生徒一人ひとりのつまづきに連動した個別最適な課題の配信
- ・進路希望に応じた個別最適な学習体制の構築（進路別の課題配信）
- ・蓄積された学習履歴による生徒一人ひとりへの個別支援
- ・講義動画を活用した授業改善
- ・ICTを活用した授業改善
- ・基礎学力の定着と進路に対する目的意識の変化
- ・進路に対する目的意識の有無と自主学習習慣の相関

### 令和5年度（1年目）

#### ○学習習慣の定着

1年目は「学習習慣の定着」を目標に、以下の取り組みを行う計画である。

- ・指導教諭を中心としたプロジェクトチームを立ち上げる。
- ・現状やプロジェクトの進行状況を月に1回、全教職員に報告し、教員間の共通理解を図り、取り組みに対する機運を高める。

- ・外部有識者による教員を対象とした個別最適な学びに関する研修会を実施する。
- ・(株)リクルートと連携して「スタディサプリ」の効果的な活用研修を実施する。
- ・年4回(4月、7月、11月、3月)に県教委、リクルートとの調整会議を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・他のモデル校(倉敷中央高校、東岡山工業高校)との情報交換を行う。
- ・生徒の「スタディサプリ」の取組状況を確認し、担任による声掛けを行う。
- ・各種テストや学習実態調査との相関について専門家による指導助言を受けながら定期的な分析会を実施し、報告することで教員間の共通理解を図る。
- ・生徒面談やアンケート調査によって生徒の変容を分析する。
- ・1年目の研究成果発表会を実施し、他校からの参加者を交えて、2年目の研究に向けた意見交換を行う。
- ・1年目の活用状況を総括し、改善点を踏まえ2年目の計画を再検討する。

## 令和6年度(2年目)

### ○基礎学力の向上

2年目は「基礎学力の向上」を目標に、以下の取り組みを行う計画である。

- ・「指導の個別化」と「学習の個性化」をテーマとした授業改善の取組を推進する。
- ・ICTを活用した指導業務の効率化の取組を推進する。
- ・生徒、教員を対象に(株)リクルートと連携して前年度の活用状況を踏まえた研修会を実施する。
- ・外部有識者による教員を対象とした個別最適な学びに関する研修会を実施する。
- ・年4回(4月、7月、11月、3月)に県教委、リクルートとの調整会議を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・各種テストや学習実態調査との相関について専門家による指導助言を受けながら定期的な分析会を実施し、報告することで教員間の共通理解を図る。
- ・アプリから生徒の「スタディサプリ」の活用状況を確認し、担任による生徒一人ひとりに個別支援を行う。
- ・生徒面談やアンケート調査によって生徒の変容を調査する。
- ・他のモデル校(倉敷中央高校、東岡山工業高校)との情報交換を行う。
- ・2年目の研究成果発表会を実施し、他校からの参加者も交えて3年目の研究に向けた意見交換を行う。
- ・2年目の活用状況を総括し、改善点を踏まえ3年目の計画を再検討する。

## 令和7年度(3年目)

### ○主体的な学び

3年目は「主体的な学び」を目標に、以下の取り組みを行う計画である。

- ・生徒面談やアンケート調査によって生徒の変容を調査する。
- ・学習習慣や基礎学力の定着と、進路に対する目的意識との相関を分析する。
- ・学習習慣や基礎学力の定着と、津商モールをはじめとした特別活動での生徒の主体的な取組との相関の有無を分析する。

- ・年4回（4月、7月、11月、3月）に県教委、リクルートとの調整会議を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・他のモデル校（倉敷中央高校、東岡山工業高校）との情報交換を行う。
- ・3年目の活用状況の総括に加え、3年間の学習習慣の変化と基礎学力の定着を分析する。
- ・3年目研究成果発表会を実施し、3年間の研究成果を発表する。
- ・本研究の成果を研究成果発表会、報告書により県内の他校に広く紹介し、学習動画アプリの導入を検討している学校に助言を行う。

#### （4）期待する成果と検証方法

この取組から得られる成果として期待するのは以下の3点が挙げられる。

- ①ICT（オンライン学習サービス）を活用して個別最適な学びを実現し、生徒一人ひとりに応じた課題による学び直しでの苦手分野の克服と、定期的な課題配信による学習の習慣化による学力の向上。
- ②基礎学力の定着と学習習慣の確立から、進路選択の幅の広がりや、学校行事への主体的な取組といった本校の目指す「ホンモノの学びの実現」に向けた相乗効果。
- ③ICTを活用した授業改善や、指導業務の効率化による、教員の働き方改革。

#### ア 定量的評価による検証

- ・進路マップ 基礎力診断テスト（(株)ベネッセコーポレーション）による学習到達度の測定 年3回（4月・9月・2月）実施
- ・スタディサプリ到達度テストによる学習到達度の測定 年2回（4月・10月）
- ・家庭学習時間、学習習慣のアンケート調査
- ・学校生活の満足度、学習意欲、授業改善の取組についてのアンケート調査（学校自己評価アンケート、授業評価アンケート 各年2回）
- ・スタディサプリの活用状況との相関関係の検証

#### イ 定性的評価による検証

- ・本校が育成したい資質・能力（自律力・協働力・実践力）に関する生徒の変容に関する調査（面談や振り返りによる見取り）
- ・生徒の進路意識、学習に対する考え方の変容に関する調査
- ・総合的な探究の時間における取組の質の向上（津商モールにおいて今までにない取り組みの提案がある）
- ・校外活動への参加回数が増加するなどの相乗効果
- ・進路の選択肢が広がり、高いレベルの進路先にチャレンジする生徒の増加

#### （5）令和5年度の具体的な取り組み

##### ア アプリ導入から実施した取組（1学期）

- ・生徒に対する取組  
課題配信・・・週1回 2科目 動画→確認テスト

スタサプLHR・・・令和5年5月17日（水）（株）リクルート担当による講演  
ログインできていない生徒を呼んで個別に声掛け・・・令和5年7月13日（木）

#### ・教職員に対する取組

到達度テスト結果説明・・・1年団：令和5年5月15日（月）  
2年団：令和5年5月17日（水）

研修会「自己効力感を高める指導を考える会」・・・令和5年7月7日（金）

講師：坂出第一高等学校 キャリア教育部進学主任 川越 俊幸 先生

「これからの専門高校指導を考える会」・・・令和5年8月30日（水）

講師：トヨタ自動車株式会社 人事部技能系人事室 採用グループ 中村 悟 様  
石川県立大聖寺実業高等学校 校長 工藤 利勝 先生  
進路担当 谷内 洋之 先生

#### ・保護者に対する取組

入学式、PTA 総会で報告

オープンスクールでのスタディサプリ体験コーナー設置

#### イ 夏季休業中のアプリ活用

週1回の課題配信を継続（学習の習慣づけ）

教科の夏季休業中の課題配信（数学・地歴公民）

1年目は「学習習慣の定着」を目標に、定期的な課題配信を行った。

まず、4月に単元別のつまずきを把握するために到達度テストを実施し、テスト結果に応じた学び直しの課題（連動課題）を生徒一人ひとりに配信した。1学期中は週末課題として、毎週金曜日に2科目ずつ定期的に配信することで、学習の習慣付けを行った。生徒の自主性を尊重するため、配信の連絡以外には特別生徒に対してのアプローチは行わなかったため、提出率は60%から73%にとどまった。このことは、約半数の生徒が「言われなくてもできる」ことを示唆している。しかし、基礎力診断テストと学習時間の調査から分かるように、「勉強しない」ことが学力の低下に繋がっていることは明らかである。そこで、取組の様子が見られない生徒には個別に声をかけるとともに、担任による聞き取りも実施した。

#### ウ アプリ活用に関する生徒の意見等（聞き取り）（令和5年度7月実施）（n=70）

##### ①肯定的回答（活用できている）

- ・予習・復習に活用している。
- ・毎日やっている。覚えてテストに使えるのが楽しい。
- ・わからないところを動画で確認、解き直しをして冊子やほかの媒体も活用している。
- ・宿題の見の利用だが、間違えたところの動画にチェックを入れて見ている。
- ・他校の生徒と比べながら見ている（実力試し）。
- ・物理など習っていない分野を学ぶことができる。
- ・数学は動画を見ながらノートに問題を解いている。

- ・途中で停止できるのがよい。
- ・国語の先生が個性的。英語は苦手克服に役立っている。
- ・できなかった問題ができる嬉しい。わかりやすい。
- ・配信日を手帳にメモするなどして忘れないようにする。
- ・アラームを設定して忘れないようにする。
- ・宿題と並行して少しずつ視聴している。あまり面白くないが、動画が新しいものなら見る。
- ・寝る前に必ず確認している。

## ②否定的（活用できていない）

- ・動画は飛ばしてしまう。長いと飽きる。
- ・簡単すぎて面白くない。
- ・ログインの仕方が分からない
- ・配信以外をどうやって見るのか分からない。
- ・得意な科目はすぐできるが、苦手な科目は後回しにしてしまう。
- ・見ないといけないの知らない。 忘れている。

## エ 教員への聞き取り（クラス担任）

### 動画視聴が多いクラス

- ・特別に何かをしているわけではない。課題が配信されることを SHR の連絡事項として伝えている。
- ・真面目にコツコツ取り組む生徒が多い。（視聴した時間がたまると嬉しい）

### 動画視聴が多い生徒

- ・スタディサプリが家庭での話題になっている。

### 取り組めていない生徒

- ・日頃から提出物が出ないなどルーズな面がある。
- ・集中して取り組むことが苦手。
- ・周りに流されやすい。

2学期は、1学期末に行った生徒への聞き取りを基に配信方法の再検討を行った。

## オ アプリ導入から実施した取組（2学期）

- ・週2回（水・金）の配信
- ・確認テスト→動画（30分以内で終わる課題）
- ・提出を徹底（できていなければ放課後に残って課題に取り組ませる）
- ・基礎力診断テストに関連した内容の配信（近い目標を設定）

週末課題にしてしまうと、「自分の好きな時にいつでも勉強できる」というアプリの利点が生かされないことから、配信を水曜日と金曜日の2回に分けた。また、必ず動画を見なければならぬ配信方法を、問題を解いて理解できていなければ動画を見る順番に変更した。講座によって

は1時間を超えるものもあるため、日頃より短い動画を見慣れている生徒にとっては長いと感じるようで、できる限り30分以内で収まるように配信の改善を図った。

1学期の研修会で学んだ他校の取組事例から、「強制」も必要であるとの考えを取り入れ、課題が完了していない生徒に対しては放課後に学習するように指示した。このことは効果があり、90%から100%の提出率となった。居残り学習をあらかじめ連絡することで、多くの生徒が放課後や休み時間を利用して課題に取り組み、教員の負担はほとんどなかった。

2学期は検定試験や学校行事が多く、課題の配信ペースを変更する必要があった。しかし、配信の間隔が空くと課題の提出率が低下するため、学習習慣を定着させるためには配信ペースを維持することが重要であると認識した。

さらに、「9月の基礎力診断テストでGTZを一つ上のゾーンに」、「10月の到達度テストで分からない問題を減らす」など身近な目標を設定できるよう、テスト範囲に連動した課題配信の配信も行った。9月末に実施した基礎力診断テストの結果では、Aゾーンの割合が5.2%増加し、例年のようなDゾーンの大幅な増加を抑制することができた。

		Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン
令和3年度入学生	R3年4月	4.4%	29.4%	44.4%	21.8%
	R4年4月	1.3%	17.4%	37.6%	44.7%
令和4年度入学生	R4年4月	6.2%	17.9%	51.9%	24.1%
	R5年4月	1.9%	13.8%	34.6%	49.7%
令和5年度入学生	R5年4月	2.5%	24.5%	45.6%	27.5%
	R6年9月	7.7%	16.7%	45.1%	29.6%

表3 入学年度別 ベネッセ学習到達ゾーン(GTZ)3教科(国数英)の推移(9月)

## カ アプリ導入から実施した取組(3学期)

冬季休業中～令和6年2月4日まで・・・水・金の連動課題配信

検定後・・・水：連動課題配信+進学・就職用課題1つ、金：連動課題配信

研修会「ICTを活用した学習指導の充実セミナー」・・・令和6年2月16日(金)

### <進学用課題>

- ・スタンダードレベルとハイレベルなどのチャレンジ問題
- ・総合型選抜対策

### <就職用課題>

- ・就職試験対策

3学期は基礎力診断テストの結果を踏まえて、定期的な課題配信を継続して行った。また、もう少し負荷をかけるべく家庭学習日を活用して週2つの課題から3つに増やし、進路に対する目的意識から学習意欲を高めるために進路別の課題配信を行った。

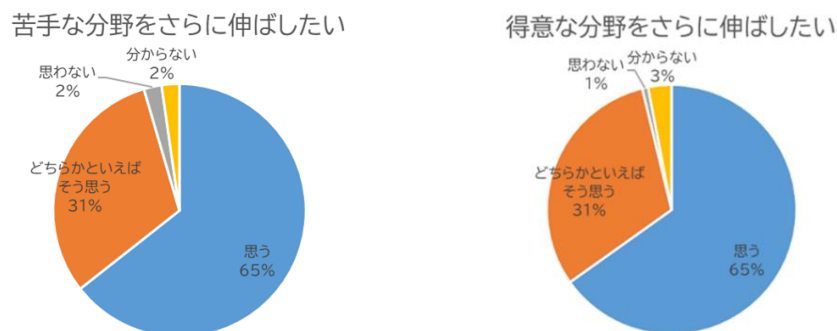
## (6) 事業の成果と課題

### ①成果



スタディサプリ導入当初、課題の提出状況は 60%ほどであった。日常的に職員会議や朝礼連絡等で定期的に報告を行ったが、学習習慣が身に付けていない生徒のスタディサプリの活用も進まない状況が見られ1学期が終了した。学年団で協議し、課題配信を学年団で一括して実施するやり方に変更し、国語、数学、英語の教科担任の「基礎学力を向上させる」という意識も変化した。同時に、生徒のアプリの取り組ませ方では、まず確認テストを受け、間違ったところを動画で確認する方法に変えた。課題配信も週1回から2回に増やし、提出を徹底させ、提出していない生徒は残ってすることを予告すると、60%ほどであった提出率が 90~100%に向上した。学習に対して消極的な生徒が増えることが心配されたが、逆にスタディサプリを使った学習が楽しいと感じる生徒が増え、10月に実施した生徒アンケートから 90.2%の生徒が主体的に取り組んでいる状況が見られ、12.1%の生徒は「指示がなくても自主的にスタディサプリを使用している」と回答している。また同調査において、アプリの内容や取り組み方が自分に合っているかどうかという質問に対して 83.3%が肯定的な回答を示した。前向きな取り組みをしている生徒の中には家庭でスタディサプリが話題になる、との報告を受けている。

当初は生徒の自主性に任せたため、課題の提出率等が伸び悩み、アプリ導入の効果が確認しにくい状況であった。2学期から取り組む姿勢に変化が生じ、徐々に目的意識をもって取り組む生徒が増えたことから、自走するまで教員がある程度方向付けをすることが重要と考えられる。



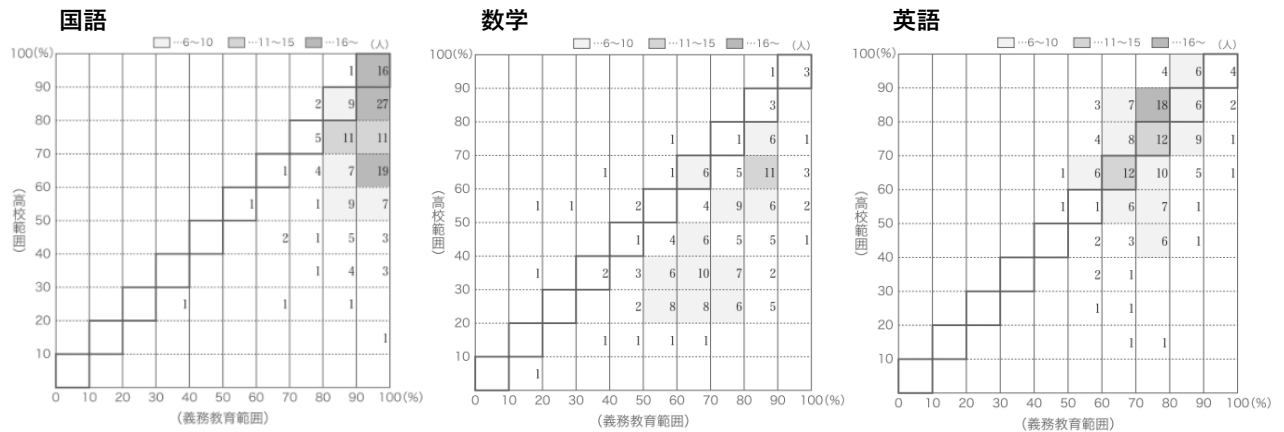
グラフ3 生徒アンケート（令和5年10月実施）

1月末に実施した基礎力診断テストの結果は次の通りであった。Aゾーンの割合は9月よりも低下したが、年度当初よりは増加した。一方、Dゾーンはわずかに増加したものの、大幅な増加は見られなかった。数字のみを見ると、BゾーンからAゾーンに移行した生徒がいると推測される。しかし、Cゾーンに移行した生徒もいるため、どのようにして生徒を1つ上のゾーンに引き上げていくかが来年度の課題であると言える。

		Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン
令和3年度入学生	R3年4月	4.4%	29.4%	44.4%	21.8%
	R4年4月	1.3%	17.4%	37.6%	44.7%
令和4年度入学生	R4年4月	6.2%	17.9%	51.9%	24.1%
	R5年4月	1.9%	13.8%	34.6%	49.7%
令和5年度入学生	R5年4月	2.5%	24.5%	45.6%	27.5%
	R6年1月	5.8%	16.9%	46.1%	31.2%

表4 入学年度別 ベネッセ学習到達ゾーン（GTZ）3教科（国数英）の推移（1月）

基礎力診断テスト（1月）の結果によると、義務教育範囲の得点率は国語 88%、数学 69%、英語 74%であった。



また、基礎力診断テストの目標得点率からの分析では、一般的に目標得点率と校内平均得点率の差は 20%~30%程度の開きが見られるが、今回は大きい値でも 10%の開きであった。これにより、基礎学力が適切に身に付けられているとの評価を業者から受けた。

### ◎校内平均と目標得点率で差が大きかった小問群

優先順位	小問群名	出題範囲			得点率(%)		差 ①-②
		小学	中学	高校	①：校内平均	②：目標得点率	
1	漢字・語い（語句の意味）		●		58	58	0
2	漢字・語い（ことわざ・慣用句）		●		82	79	3
3	漢字・語い（漢字の読み）		●		88	84	4
優先順位	小問群名	出題範囲			得点率(%)		差 ①-②
		小学	中学	高校	①：校内平均	②：目標得点率	
1	最大値・最小値			●	42	40	2
2	応用問題		思	●	39	35	4
3	方程式		●		75	70	5
優先順位	小問群名	出題範囲			得点率(%)		差 ①-②
		小学	中学	高校	①：校内平均	②：目標得点率	
1	指示語の理解		思	●	53	63	-10
2	助動詞		●		46	51	-5
3	不定詞・動名詞		●	●	56	55	1

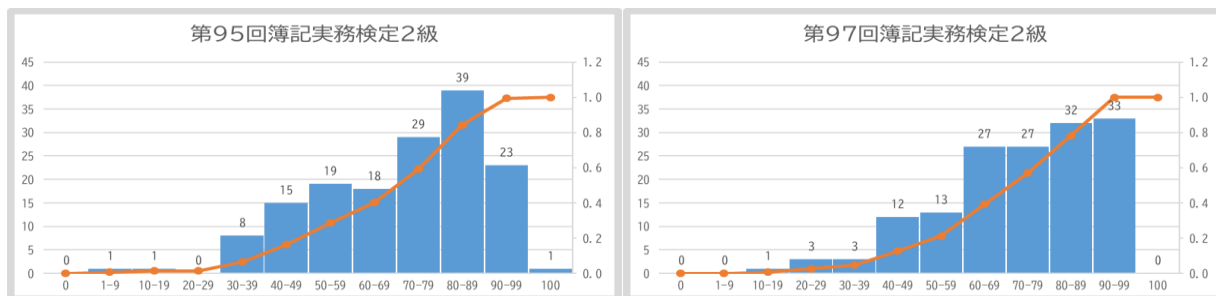
表5 基礎力診断テスト（1月）教科診断レポートより

さらに、全国商業高等学校協会主催英語検定では、9月に1年生全員が全商英検3級、12月は3級か2級のどちらかを受験している。従来の取組とスタディサプリの相乗効果により、例年85%前後の取得率のところ、今年度は94%が3級を取得している。

Aゾーン	3級	2級	1級
R3年度	136	4	0
R4年度	138	17	0
R5年度	150	23	1

表6 全国商業高等学校協会主催 英語検定（1年生合格者数）

3教科以外では、全商簿記検定の結果を見ると昨年度と比較して、合格者数は増えなかったが、得点分布は下位層が減少し、上位層が増加している。



グラフ2 全国商業高等学校協会主催 簿記検定（度数分布）

## ②課題

1年目は課題の配信に主眼が置かれており、検定や進路イベントとの連携が十分ではなかった。個々の生徒に合った個別最適な課題を与えることは重要であるが、それだけでは十分とは言えない。生徒が自発的に学習に取り組むためには、進路に対する明確な目的意識が必要となる。

また、現在は学年団の取組であるという意識が強いが、次年度からは全学年でスタディサプリを導入する予定である。全教員が課題の配信や、生徒の取り組み状況を把握できるようになってはいるが、ログインする教員はまだ限られている。それでも、活用している教員からは「勉強の機会が増えるのは良いこと。ドリル学習による勉強時間の増加は、学力向上につながる」、「課題の配信・回収が楽。授業でフォローできないところが担保できている。」などといった肯定的な声がある。授業や課題の配信等で多くの教員が活用することで、機運の高まりはもちろんのこと、授業改善や働き方改革への効果も期待したい。

「個別最適な学び」を実現するためには「指導の個別化」と「学習の個性化」が不可欠である。現在はアプリの導入により、「指導の個別化」が進み、生徒一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度に応じた教材や学習環境を提供できている。しかし、生徒の自己肯定感や主体性を高めるためには、教員の関わりが不可欠である。今後の取組では学習履歴のデータなどを活用し、「学習の個性化」に焦点を当て、今まで以上に生徒一人一人に応じた目標設定の支援や動機付けができるような取り組みを行うことが重要である。

### (7) 令和6年度の計画

- ・学習到達度と進路希望に応じた個別最適な学習体制の構築（より細分化した課題配信）
- ・検定や進路イベントと関連付けた学習意欲の喚起、課題配信
- ・各教科での活用（課題配信、授業等での活用）
- ・商業科目での活用
- ・組織的な取組
- ・学習データを活用した指導

- ・校務機能の活用の研究（ポートフォリオ、面談シート）

令和6年度は、教員が生徒の特性や進路希望、学習到達度に応じて生徒一人ひとりへのアプローチを行うことで、生徒が自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなるよう支援する体制を整える。また、生徒の変容を見取り、課題をより具体的に把握し、取組の改善に生かす取組を行う。